

[Original Paper]

## Differences in the Feelings of Subjective Well-Being according to Social Statuses

— Through the Life History —

Yuko Yamamoto\*, Els-Marie Anbäcken\*\* and Fumio Nakadomo\*\*

\* Department of Nursing, Faculty of nursing and rehabilitation, Aino University

\*\* School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University

### Abstract

In order to understand the relationship between the social statuses acquired thorough employment in the life history and a feeling of subjective well-being after mandatory retirement, We had interviews with two different groups of 15 elderly people concerning the theme “what do you think when you look back on your whole life? And why do you think so?” As a result, it was revealed that the acquired social statuses do not affect their feeling of subjective well-being but that ensuring financial stability and maintaining relationships with society through worthwhile activities lead to their feeling of subjective well-being. The elderly people themselves looked back on and talked about their lives and what they felt at the time, which became an opportunity for them to look at their lives in positive light and led to a feeling of subjective well-being.

**Key Words** : social status, age-limit retirement, elderly people, feeling of subjective well-being, life history

# 社会階級による高齢者の主観的幸福感の相違について

—— 人生暦を通して ——

山本裕子\*, Els-Marie Anbäcken\*\*, 中塘二三生\*\*

【要 旨】 人生暦を通して、就業中に得た社会階級と定年退職後の主観的幸福感との関係を明らかにするために、異なる2グループの高齢者15名を対象にテーマ「自分自身の今までの人生暦をふり振り返りどのように思うか、その理由は何か」についてグループインタビューを行った。結果、社会階級のあり様が高齢者の主観的幸福感に影響をあたえるのではなく、経済的安定がありかつ生きがいのある活動を通じて、社会との関係を持つことが主観的幸福感につながるようになった。また、本研究を通じて高齢者自身が自分自身の人生暦を振り返ることにより、人生を肯定的に捉え主観的幸福感を増大させる可能性が示唆された。

キーワード：社会階級、定年退職、高齢者、主観的幸福感、人生暦

## I. 研究の背景

人はこの世に誕生した瞬間から、一步一步死に向かって歩み始める。その中で、人は年齢を重ねながら社会の中で心身共に成長を遂げ、そして社会的相互関係の中で役割の習得と離脱を繰り返し、やがてすべての人が高齢者となる。現在の我が国の高齢化率は、23.1%となり<sup>1)</sup>5人に1人以上が高齢者でそのうち介護保険により要介護者および要支援者と認定された高齢者は約2割で何らかの援助を受け<sup>2)</sup>、残り約8割の高齢者は地域の中で日常生活を営んでいる。これらの地域の中で生活をしている高齢者に対しても、Quality of Life (以下、QOLとする)の維持向上や心の安寧・その人らしい人生を全うできるように高齢者を支えながら援助を提供していく必要があると考える。そして、高齢者が自分自身であり続けることに意味を

見出す<sup>3)</sup>だけでなく、生きる意味の探求、意味のある生の探求のニードを満たし<sup>4)</sup>、自分自身が培ってきた人生のスタイルを保持する<sup>5)</sup>ことができるような援助を提供することが重要であり、このことが主観的幸福感につながると考えられる。Jung<sup>6)</sup>は、人は40歳以降になって個性化(よりその人らしくなる)の発達過程が始まり、ライフサイクルの後半にわたって継続すると述べている。多くの男性は、就業しておりその中で企業および業務内容等により社会階級が生まれ、その時に得た個性が定年退職後の高齢者の個性にも影響を与えると考えられる。また、社会進出が進んだ現在においては、女性も男性と同様さらに配偶者を持つ就業していない女性においても配偶者の社会階級の影響を受けると考える。Clausen<sup>7)</sup>は、社会階級においては労働者階級より中産階級の方が多くの点で役割遂行に有利であり、人生の満足感が高いと報告し、武

\* 藍野大学医療保健学部看護学科

\*\* 関西学院大学大学院人間福祉研究科

石<sup>8)</sup>も生活満足感や自分の社会階級の満足感といった要因に規定されると述べていることから、社会階級は人生の満足感と生活満足感である主観的幸福感に大きく関係すると考えられている。これまでの研究においては、社会階級が高い視点から述べられたものが多く、社会階級が低い視点から述べられたものは見当たらない。よって、男性にも女性にも影響を与え、加えて主観的幸福感にも関係する社会階級が、退職後の主観的幸福感に与える影響について、さらなる検討する必要があると考える。

## II. 研究目的

本研究は、高齢者を対象として就業中に得た社会階級と定年退職後の主観的幸福感との関係について人生暦を通して明らかにすることを目的とした。

## III. 用語の定義

本研究において、用語の定義を以下の通りにする。

- ・社会階級とは、価値観や生活水準が似ていると自らが思い他人からもそのように思われている集団とする<sup>9)</sup>。
- ・定年退職とは、正規雇用や長く勤めた仕事から引退し老後生活を送ることとする<sup>10)</sup>。
- ・主観的幸福感とは、主観的な生活満足感や人生の満足感を総合したものとする。
- ・キャリアとは、専門的スキルを有していることとする<sup>11)</sup>。
- ・人生暦とは、誕生から現在までのライフコース上の社会的、文化的、肉体的、精神的な出来事とその出来事に対する高齢者の思いの軌跡とする。

## IV. 研究方法

### 1. 対象者

対象者は、グループインタビューを実施したボランティアグループ「T」の男性3名、女性2名の計5名（以下、Aグループとする）および日本セカンドライフ協会の男性6名、女性4名の計10名（以下、Bグループとする）の2グループ15名である（表1）。

#### 1) ボランティアグループ「T」の特徴

ボランティアグループ「T」は、C市に所属し、特別養護老人ホームなどにおいて入居中の高齢者と歌を唄ったり、手品の披露などで高齢者の心を癒し元気づ

ける活動を行っている。本グループに所属する人は、一般企業のサラリーマンとして働き定年退職を迎えた人々であり、またはサラリーマンの夫を持つ妻たちである。

#### 2) 日本セカンドライフ協会の特徴

日本セカンドライフ協会は、一部上場の企業に勤務していた管理職経験者が中心となり、退職後も様々なことに好奇心を持ち続けて、生きがいのあるセカンドライフを送ることを目的とした全国の規模の団体である。本協会は、由緒ある名跡の探訪・観劇・食事会・清掃ウォーク・ゴルフコンペさらに専門家による講演会など多岐にわたる活動を行い、さらに年4回の機関誌を発行されている。本協会に所属する人たちは、一部上場の大手企業に勤務していた管理職経験者である。なお、本研究において日本セカンドライフ協会の名称を公表することについては、同意を得ている。

### 2. データ収集方法

グループインタビューは静かな個室で行い、所要時間はAグループ1時間30分、Bグループ2時間20分であった。まず、グループインタビューを始める前に人生暦の言葉の意味について説明を行った。その上で、テーマ「自分自身の今までの人生暦をふり返りどのように思うか、その理由は何か」についてグループインタビューを実施した。

本研究を対象者自身が語る言葉による質的研究とした理由は、高齢者自身が自分の人生の意味を一番よく知っており<sup>12)</sup>、年月の中に詰まった経験や出会い、様々な言葉を拾い上げることにより誰のものでもない高齢者自身の人生という物語が浮き上がってみえてくるからである<sup>13)</sup>。

グループインタビューとした理由は、グループダイナミクスにより多くの高齢者の言葉を引き出すことが可能となり、様々な人生暦を理解するに有効であると考えるためである。

インタビュー内容を電子媒体に録音し逐語録を作成した。なお、対象者には、発言者と逐語録のデータとの整合性を図ることと、倫理的配慮に基づき発言者を氏名で呼ぶのではなく、対象者の了解のもと番号で呼名した。さらに、インタビュアー以外に観察者も同席し対象者の様子観察を実施し記録した。

### 3. 分析手続き

グループインタビューごとに逐語録を繰り返し読み、対象者が語るテーマ「自分自身の今までの人生暦をふ

表 「社会階級」「主観的幸福感」「人生暦のふり返り」に関する対象者の意味ある文脈と観察内容

グループ	対象者番号 性別, 年齢	社会階級	「社会階級」「主観的幸福感」「人生暦のふり返り」に関する 対象者の意味ある文脈と観察記録
A グループ	A1: 男性, 70歳代後半 途中退席	退職前は一般企業のサラリーマンとして勤務した。	「平凡すぎた。」
	A2: 女性, 70歳代前半	主婦でボランティア活動をしている。	「主人の定年までおかげさまで普通に生活できました。」 「普通の人生です。」 「ボチボチやらせてもらっています。」 「頑張ります。」
	A3: 女性, 60歳代前半	主婦経験後、介護職員資格を取得し就業した後、退職した。	「いろいろあったけれども何とかやってこれました。」 「(ヘルパー) 資格を取ったら、パッと広がったのです。」
	A4: 男性, 70歳代後半	退職前は一般企業のサラリーマンとして勤務した。	「ある程度も自分の人生なんて、振り返ったことない。」 「持って生まれた運ってしか言いようがない。」 「人生って死に際だけだな。」 「よくあれだけ酒を飲んだな。」 「自分の人生狂うほど飲んでいたら、サラリーマンでね、定年迎えることは出来なかつたろうし〜。」 「酒を止めて6年ちょっとになる。」 「妻は、一言も僕の生きざまに関して文句は言わなかったし、言っても僕は聞かんとするね。今考えたら、よく捨てられなかったなあと思うな〜。」 「飲む、打つ、すべてやっていたからねえ〜。安月給で、そんなことやって、よう務まったな〜。」 「家内を胃がんで亡くしたんだけど。今になって、もう平気なんだよ。亡くしたこと自体はね。生きていかなきゃいけないからね。」 「苦勞を苦勞と思わないから、幸せな人生だったとしか言いようがない。」 「天下泰平やと思っている時期やね。」 「苦勞はあった、それはもう過ぎ去ったこと。」 「振り返ったら、まあ、…幸せだったとしか…。」〈考えながらゆっくりと〉
	A5: 男性, 70歳代前半	退職前は一般企業のサラリーマンとして勤務した。	「なんとか、人並みについてきたっていうだけで…。」 「平穩というかあまり変化がなかった。」 「会社時代の友達はいないことは無いが遠くなった。」 「ボランティアの人たちと交流している。」 「そろそろ終末も近いかなあ。」〈笑〉 「頭の手術を行い心配であったし、手術後は会社に行くのが怖かった。」 「頭の手術をした時の思いは、半分が家族で、半分が仕事をしたいという気持ちです。」 「景気が悪い時は首をきるぞうとか…」 「平凡やったね。」
B グループ	B1: 女性, 60歳代後半	退職前は一部上場の製薬会社に勤務した。	「女から使われるのがイヤやっていうことで、2回泣きました。」 「辛い目もしたけどいい目もすごくさしてもらっていただいて。」 「仕事面白く、定年まで会社務めさせていただき楽しいことばかりでした。」
	B2: 女性, 60歳代後半	退職前は一部上場の小売業に勤務した。	「デパートにちょっと勤務し、仕事の面白みがどんどん湧いてきて信用がついてやったんですね。」 「一生懸命頑張ってきました。」 「親に感謝しています。」
	B3: 女性, 70歳代前半	以前は旅館を経営していた。	「母を悲しませずに見送ったことが、自分の誇りです。」 「旅館してる人と結婚し地域の人に育ててもらい、そして子供にも育てられました。」 「自分ができなかったことは、子供たちには思いきりさせてやりたいなあと思っている。」 「今はただやっぱり、人様の話もちゃんと聞いてあげられる人になりたいなあって思ってます。」
	B4: 女性, 70歳代前半	退職前は一部上場の製薬会社に勤務する。	「淡々とここまで働いて生きてきたというような話です。」 「自分の老後は考えておかないと思っていて、今は老人ホームに入っております。」 「人生は、まだまだ考える余地があると思います。」

表 「社会階級」「主観的幸福感」「人生暦のふり返り」に関する対象者の意味ある文脈と観察内容

グループ	対象者番号 性別, 年齢	社会階級	「社会階級」「主観的幸福感」「人生暦のふり返り」に関する 対象者の意味ある文脈と観察記録
B グループ	B 5 : 男性, 70 歳代後半	退職前は一部上場の商 社に勤務し、現在も法 律関係の仕事に従事し ている。	「良かったなあということが、私のまあ人生観です。」 「反骨精神で頑張ってきた。」 「こちらに集まっておられる人たちは、どちらかというとして人生で成功者か不成功者か といったら幸せな部類のほうの人ばかりの集まりです。」〈対象者の数名が頷く〉 「ただ中途半端に悲しいことっていうのはなんとなく消えていってね、何か の折に触れて、ああ、そういうつらいこともあったんだなあ、という程度です。」 「嬉しい思い出は、離島に海底送水管を創設した時のことです。」 「苦しかった思い出は、外国産の機械を技術導入したが、うまく製品が作るこ とができなかったことです。」 「自分史をよく書くなあなんて思っていました、やっぱり必要ですな。」
	B 6 : 男性, 70 歳代後半	退職前は一部上場の金 融会社に勤務する。	「食う物もなし、家なし、金なし、3 なしで、大学までは自分は全然行く気がな かったんですね。」 「高校を出たらとにかく自分で食うと。金を稼ぐ。家を建てる。家庭を作ると。 これを目指してね。だから迷わず、ぼんと仕事に出たんです。」 「最終選考まで残ったが、家系調査の結果やっぱり落選でした。」 「45 年、まあ何と言うんですか、食べて、家族を作って、家を建ててとやってき たんです。」 「まだ解決していないのが、父親との関係で意思疎通が出来なかった。」 「息子とやっぱり話ができませんね。」
	B 7 : 男性, 60 歳代後半	退職前は一部上場の金 融会社に勤務し、講演 等活動を行っている。	「お金が無かったから、大学へ行きたかったのですが行けなかった。」 「当時の銀行はね、片親っていうのはね、ダイレクトには言わないかもわかんない けど採らないのがね、銀行のまあ〜ルールっていうかね。」 「学歴というのね、ひとつの壁として私はありましたね。」 「一隅を照らすという言葉が好きなんです。」 「今の到達点を見る限りは、幸せな形の中でいま生活させていただいておるとい うようなことが基本になつてると思いますからね。」
	B 8 : 男性, 70 歳代前半	退職前は一部上場の機 械メーカーに勤務す る。	「自分自身は書いていますが、自分史的なものを人に披露するつもりもありません。」 「父親が良い学校出るよ、良い会社に勤めろよ、と言う。」 「親の代から家族、親戚を大切にしろと言うことは教えこまれました。」 「(家族を) 食べさせていくことだけは、飢えささんことだけは、しっかりしない かんなどと思って今日来ていますね。人生観としたらですね。」 「波瀾万丈な人生を、幸か不幸か、送っていないんで。」 「人間関係の絆、家族の絆というのは一番、僕は絆という言葉を常に座右の銘に しています。」 「無事平穩に一生終わったらええなと思っています。」
	B 9 : 男性, 70 歳代前半	退職前は一部上場の小 売業に勤務し、3 つの 自主グループの世話役 などの活動を行ってい る。	「もう人生で 3 回、悲しい出来事ございましてね。それはひとつは 24 歳のとき に、父親が亡くなりまして。そして、仕事のところで私がある管理職をやると ころで、部下が大変大きな不正をやってくれまして。」 「一番つらかったことが平成 7 年の阪神大震災…。」 「人の縁がものすごくありがたい。」 「おかげさんで。」 「今も割合に気楽にいるのです、おまけの人生やと思っています。」 「家に自宅介護の家内のお母さんと、そして実の母が妹のところに 2 人の要介護 者がおりますわね。けれどね、問題はとらえ方で、もう本当に大変なんだけど、 これも私たちの通る道やというような形の中で気楽に考えて私なりにはしと るつもりです。」 「おまけの人生で、楽しく生きようという形のところでね。」 「ひとつは健康、そしてそれは一生、青春ね。」
	B 10 : 男性, 70 歳代後半	退職前は一部上場の小 売業に勤務し、現在は 地域で自主グループを 組織し活動中である。	「自分史はすでに、結婚するまでを書いております。」 「座右の銘は、一病あって息災から二病息災に変えました。」 「反骨精神で頑張ってきました。」 「御堂筋にあるかなりの企業のインテリア関係でタッチした。」 「定年後、私は国文出身ですので 5 年間塾の先生をしました。」 「仕事で万博、150 回くらい行きました。」 「なんでも見てやろう精神も大切です。」 「おかげですかね。」

\*対象者の「生の言葉」を「 」として表記する。

\*観察内容を〈 〉として表記する。

り返りどのように思うか、その理由は何か」に関する語りの中から、「社会階級」「主観的幸福感」と「人生暦のふり返り」についての意味のある文脈（対象者が発言した言葉）を分析対象とし、安梅<sup>14)</sup>の手法を参考に内容分析を行った。

#### 4. 倫理的配慮

本研究を実施するに際して、対象者に研究の目的・方法と倫理的配慮の内容を文書および口頭にて説明し対象者から「同意書」を得た。「同意書（控）」については、対象者が保管することとした。説明内容は、研究に協力する・協力しないはあくまでも自由意志であること、研究協力を途中で撤回しても何ら不利益はないこと、研究協力を途中で撤回しても何ら不利益はないこと、氏名およびグループ名は、匿名化にするため個人およびグループを特定することはできないこと（ただし、当該グループより名称公表の許可がある場合はこれに該当しない）、得られたデータは鍵のかかる場所に保管すること、研究終了後提供されたデータは破棄すること、正確な逐語録を得るために電子媒体に録音することに了解を得ること、などである。なお、本研究は関西学院大学の臨床・調査・実験研究倫理委員会の承認を得ている。

## V. 結 果

テーマ「自分自身の今までの人生暦をふり返りどのように思うか、その理由は何か」について述べた文脈から「社会階級」「主観的幸福感」と「人生暦のふり返り」に関する意味のある文脈を抽出した（表1）。なお、対象者の「生の言葉」を活かしたもので表記方法は「 」として表わし、就業中の内容については業務及び職責に関係した事のみを集約し記した。

### 1. A グループの場合

#### 1) 「社会階級」について

対象者 A-3 は、「資格を取ったら、パッと広がったのです。」と言い、介護職員の資格を取得することにより社会階級が変化し人生が広がったと述べた。対象者 A-4 は「飲む、打つ、すべてやっていたからねえ〜。安月給で、そんなことやって、よう務まったな〜。」と、対象者 A-5 も「景気が悪い時は首をきるぞうとか……」と自分自身の企業における立場に関する言葉を述べた。対象者 A-1, A-2 ともに就業中の業務内容などの発言はなかった。そして、学歴について

述べた対象者はいなかった。

#### 2) 「主観的幸福感」について

主婦である対象者 A-2 は、「おかげさまで」と感謝の意味のある言葉と「頑張ります。」という意欲を言っていた。対象者 A-4 は「妻は、一言も僕の生きざまに関して文句は言わなかったし、言っても僕は聞かんと思うね。今考えたら、よく捨てられなかったなあと思うな〜。」という妻に対する言葉と「家内を胃がんで亡くしたんだけどね。今になって、もう平気なんだよ。亡くしたこと自体はね。生きていかなきゃいけないからね」という自分自身が生きていくための心の内を語った。そして、グループインタビュー当初の「ある程度も自分の人生なんて、振り返ったことない」の言葉とは異なり「苦労を苦労と思わないから、幸せな人生だったとしか言いようがない。」「持って生まれた運ってしか言いようがない。」と、加えて「振り返ったら、まあ、……幸せだったとしか……」という言葉を考えながらゆっくりと発していた。対象者 A-5 は「平穏というかあまり変化が無かった。」と言い、今後の自分自身について笑いながら「そろそろ終末も近いかなあ」と述べていた。

#### 3) 「人生暦のふり返り」について

対象者 A-1 は、「平凡すぎた。」と述べた後、席を立ち退出した。主婦である対象者 A-2 は「普通の人生です。」「ポチポチやらせてもらっています。」と、対象者 A-3 は「何とかやってこれました。」と述べていた。対象者 A-4 は、「ある程度も自分の人生なんて、振り返ったことない」「よくあれだけ酒を飲んだな。」「自分の人生狂うほど飲んでいたら、サラリーマンでね、定年迎えることは出来なかっただろうし〜。」と言い、妻の死に対して「家内を胃がんで亡くしたんだけどね。今になって、もう平気なんだよ。亡くしたこと自体はね。生きていかなきゃいけないからね。」と、述懐していた。対象者 A-5 は、「人並みについてきたっていうだけで……。」「平凡やったね。」と人生を振り返っていた。

### 2. B グループの場合

#### 1) 「社会階級」について

現在も就業しているのは対象者 B-5・B-7・B-9・B-10 の4名で、対象者 B-5 は裁判所の調停員として、対象者 B-7 は遺産などに関する講演活動を行い、対象者 B-9 は自主グループの役員として、対象者 B-10 は塾の講師や地域の自主グループの役員として活動を行っている。

女性である対象者 B-1 は、「女から使われるのがイヤやっていうことで、2回泣きました。」と男性上位に関係する言葉を述べた。さらに女性である対象者 B-2 は、「デパートにちょっと勤務し、仕事の面白みがどんどん湧いてきて信用がついてきたんですね。」と語った。対象者 B-5 の「こちらに集まっておられる人たちは、どちらかというとな人生で成功者か不成功者かといったら幸せな部類のほうの人ばかりの集まりです。」の発言があり、その際数名の対象者が頷いたことが観察された。さらに、対象者 B-5 は、自身が関わった仕事である「離島に海底送水管を創設した時のこと」「外国産の機械を技術導入したこと」を披露した。対象者 B-6 は「最終選考まで残ったが、家系調査の結果やっぱり落選でした。」と、対象者 B-7 は「当時の銀行はね、片親っていうのはね、ダイレクトには言わないかもわかんないけど採らないのがね、銀行のまゝ〜ルールっていうかね。」「学歴というのはね、ひとつの壁として私はありましたね。」と述べ、就職と経済的問題や家族的問題との関係について語った。対象者 B-9 は「私がある管理職をやったところで、部下が大変大きな不正をやってくれまして。」と管理職時代のことを述べた。対象者 B-10 は「御堂筋にあるかなりの企業のインテリア関係にタッチした。」と自身が携わった業務について話した。B グループ対象者 10 名中就業中の業務内容について語らなかったのは、対象者 B-3、B-4、B-8 の 3 名であった。

## 2) 「主観的幸福感」について

対象者 B-1 と対象者 B-2 は「辛い目もしたけど、いい目もすごさしてもらって。」「仕事面白く、定年まで会社務めさせていただき楽しいことばかりでした。」「仕事の面白みがどんどん湧いてきて信用がついてきたんですね。」と、仕事の面白さについて発言をした。対象者 B-3 は「母を悲しませずに見送ったことが、自分の誇りです。」と母への思いを話した。対象者 B-5 は「良かったなあということが、私のまゝ人生観です。」「こちらに集まっておられる人たちは、どちらかというとな人生で成功者か不成功者かといったら幸せな部類のほうの人ばかりの集まりです。」と、B-グループの対象者を成功者であり幸せ者であると評していた。対象者 B-7 は「今の到達点を見る限りは、幸せな形の中でいま生活させていただいておるといようなことが基本になると思いますからね。」と、現在を過去と比較して述べていた。対象者 B-8 は「波瀾万丈な人生を、幸か不幸か、送っていない

で。」と、今までの人生を振り返った。対象者 B-9 は過去の大きな悲しい出来事乗り越え、「今も割合に気楽にいるのです、おまけの人生やと思っています。」「おまけの人生で、楽しく生きようという形のところでね。」と、今後の人生の過ごし方について語った。対象者 B-9 と対象者 B-10 は「おかげ」という言葉を口にした。

## 3) 「人生暦のふり返し」について

女性である対象者 B-1 は「仕事面白く、定年まで会社務めさせていただき楽しいことばかりでした。」と就業することの面白さについて語った。対象者 B-3 は、「旅館してる人と結婚し地域の人に育ててもらい、そして子供にも育てられました。」と言い、自分自身と地域や子供たちの関係について述べていた。対象者 B-4 は、「淡々とここまで働いて生きてきたというような話です。」「人生は、まだまだ考える余地があると思います。」と言っていた。対象者 B-5 は、「良かったなあということが、私のまゝ人生観です。」と、自分自身の人生について話した。対象者 B-6 は、「食う物もなし・家なし・金なし 3 なしで、大学までは自分は全然行く気がなかったんですね。」「高校を出たらとにかく自分で食うと。金を稼ぐ。家を建てる。家庭を作ると。これを目指してね。だから迷わず、ぼんと仕事に出たんです。」「45 年、まゝ何と言うんですか、食べて、家族を作って、家を建ててとやってきたんです。」と述べ、何もないところから家庭と家を作ったことを話した。対象者 B-7 は、「お金が無かったから、大学へ行きたかったのですが行けなかった。」と語り、対象者 B-6 と同様に大学卒でないと言うことを述べている。対象者 B-8 は、「(家族を) 食べさせていくことだけは、飢えささんことだけは、しっかりしないかなんと思って今日に来ていますね。人生観としたらですね。」と家族への役割を話した。対象者 B-9 は「もう人生で 3 回、悲しい出来事ございましてね。」と言い、その 3 つの出来事について語った。対象者 B-10 は「反骨精神で頑張ってきました。」と話した。

## 3. A グループと B グループの対象者の人生に影響を与えたもの

人生に影響を与えたものとして、対象者 A-3 は「(ヘルパー) 資格を取ったら、パツと広がったのです。」と資格が人生に影響を与えたと話し、また対象者 A-4 は「よくあれだけ酒を飲んだな。」と嗜好について語った。対象者 B-2 は「親に感謝しています。」と、対象者 B-8 は「父親が良い学校出ろよ、良い会

社に勤めろよ、と言う」と親の存在について述べた。対象者B-5は「反骨精神で頑張ってきた。」と、加えて対象者B-10も「反骨精神で頑張ってきました。」と自分の気概の在り様が人生に影響を与えたと語った。対象者B-8は「人間関係の絆、家族の絆というのは一番、僕は絆という言葉に常に座右の銘にしています。」と、対象者B-9は「人の縁がものすごくありがたい。」と、人間関係を言葉にした。

#### 4. AグループとBグループのグループインタビューを通して

自分自身の今までの人生暦のふり返りについて、対象者A-4は、グループインタビュー開始の時点では「ある程度も自分の人生なんて、振り返ったことない。」と述べていたが、時間の経過とともに「振り返ったら、まあ、……幸せだったとしか……。」と、考えながらゆっくりと発言した。また、対象者B-5は「自分史をよく書くなあなんて思っていました、やっぱり必要ですな。」と述べた。対象者B-10は「自分史はすでに、結婚するまでを書いております。」と言い、対象者B-8は「自分自身は書いていますが、自分史的なものを人に披露するつもりもありません。」と、人生暦を書いてはいるが他者には公表しないと語った。

## VI. 考 察

退職は、給与生活から年金生活の移行期でありそれに伴い人的ネットワークおよび生活や経済的基盤などの再構築を始める時期でもあるため不安は大きく、特に男性の引退過程の実態から考えて人生において深刻な影響を心身に与えるライフイベントである<sup>15)</sup>。近年、多くの高齢者にとって、年金制度の充実や高齢者福祉の充実により、退職後に年金による経済的な保障を得て自由に趣味や社会活動に参加できる可能性が高まった<sup>16)</sup>。平成22年度版高齢社会白書<sup>17)</sup>によれば、現在高齢者の内65～69歳男性の50.1%が就業しており、不就業の49.9%のうち2割以上の高齢者が就業を希望している。その理由としては、「健康を維持したい」「知識や技能を生かしたい」ということがあげられ、定年退職後の高齢者の就業に対する意識が高いと思われる。Paillat<sup>18)</sup>は、健康な老人にあって老人たちを差別する最大の原因は職業活動であると述べている。さらに、高齢者の就業において学歴が決定的な影響を及ぼす一つの要因であることも指摘されているこ

とから<sup>19)</sup>、高齢者の就業は容易ではないことがうかがえる。このような現況にあって、Aグループの対象者は、全員再就職しておらず、就業中の人生暦をふり返り「安月給で……」という言葉や「首をきるぞう～」という発言から企業の管理者的立場でなかったことが推測される。また大手企業の管理者的立場であったBグループの10名中4名は、就業中に培ったキャリアを活かして退職後も再就職し社会とつながりを持っている。八田<sup>20)</sup>は、学歴、企業規模、役職などの過去のキャリアが高齢者の就業継続に影響を与えると報告している。加えて、武石<sup>21)</sup>は退職後の就業は「自分の社会階級」や「自分の仕事」との相関が高いと述べている。よって、Aグループの対象者とBグループ対象者との間には、就業中の企業規模や役職からみて社会階級に相違があると考えられる。Bグループの2名は、経済的及び家庭的理由が大学進学や就職の際に影響があったことを述べていた。植木<sup>22)</sup>は、1885(明治18年)に著した「貧民論」の中で、貧民は「財産の乏しき輩」であっても「賤しき者」「愚かなる者」を意味せず、「不幸にも社会の有様によってその地位に回り合わせた」に過ぎず、「国家社会」に均一の権利・保護を求めることの道理が存在すると述べているが、明治・大正・昭和と時代は移り変わったが今の高齢者たちの青春時代においてもこのような風潮があったことが推察される。また、Bグループの1名は「こちらに集まっておられる人たちは、どちらかという人生で成功者か不成功者かといったら幸せな部類のほうの人ばかりの集まりです」と言い、その発言に頷く者がいた。Bグループ対象者たちが、就業していた期間には日本の高度成長期も含まれており、この時期の成功の意味には、法の範囲内で平均以上に金を儲けた人と出世した人を指す言葉であった<sup>23)</sup>ため、自分たちは、管理職にまで出世しそれに伴い給与も一般職員よりも多かったことから成功者と表現したと考えられる。村上<sup>24)</sup>は、今も金を儲けるとか、出世するというのは現代でも成功の範疇にはいると指摘している。Aグループの対象者は、就業に関する業績や業務内容を語ることは無かったが、Bグループの対象者は業績や業務内容を語る対象者がいた。このことは、現役時代の仕事に関連した経歴や業績を語ることにより、男性の発達の様相である他者と区別する自分の特徴を強調する事によって自己を確認し、人との分離を通して自己の存在に意味づけしていると考えられる<sup>25)</sup>。

一方、AグループとBグループのすべての対象者

は、それぞれの活動を通じて社会との繋がりを持っている。金子<sup>26)</sup>は、自分自身のために何かをすることを1人称の生きがい、家族・親族、友人などのために何かをすることを2人称の生きがい、他人と地域社会のために何かをすることを3人称の生きがいと表現し、生きがいを目的別に区分している。Aグループの対象者は地域社会のために何らかの貢献をすることを目的としたグループのため3人称の生きがいを持ち、Bグループの対象者は、生きがいのあるセカンドライフを送ることを目的としたクラブのため1人称の生きがいを持っている。前田<sup>27)</sup>は、「生きがいの有無」と「生活満足感」との間には有意な正の関連を示すと報告し、加えて武石<sup>28)</sup>も「ボランティア組織」「住民運動団体」「趣味やスポーツのサークルや団体」に参加し社会活動を行っている人は、人生満足感が高いと述べていることから、Aグループ・Bグループともに生きがいを持っていることから生活満足感や人生満足感が高い、つまり主観的幸福感が高いと考えられる。

経済的な側面からとらえると、AグループもBグループの対象者も、定年退職まで長期にわたり就業していたことから年金の受給があると考えられる。岩井<sup>29)</sup>は、高齢者の現在の生活に対する主観的な幸福感に世帯収入によって規定される傾向が強いと報告している。このことから、Bグループの対象者もAグループの対象者も年金等で経済的な安定を得ているため、主観的な幸福感があると考えられる。

さらに、Bグループの対象者からは、「こちらに集まっておられる人たちは、どちらかという人生で成功者か不成功者かといったら幸せな部類のほうの人ばかりの集まりです」や「今の到達点を見る限りは、幸せな形の中でいま生活させていただいておるといようなことが基本になつておるとおもいますからね。」と明確に主観的幸福感を発言があった。しかし、Aグループの4名も人生暦をふり返り「平凡すぎた。」「普通の人生です。」「ボチボチやらせてもらっています。」などは、自分自身の人生暦を否定的に捉えた発言では無かったことから自分自身の人生暦を受け入れていると思われる。しかし、Aグループの1名のみが、「酒中心の人生」であった事を語り「自分の人生なんて、振り返ったことない」と発言していたが、グループインタビュー終了時には「振り返ったら、まあ、……幸せだったとしか……。」「と、主観的幸福感を述べるに至った。この変化は、本研究が自分自身の人生暦を振り返る契機となったと考える。また、6年前に亡くなった妻について「今になって、もう平気なんだよ。

生きていかなきゃいけないからね。」と語っている。妻との関係は就業中においては重要であるが、退職後は妻の重要性は相対的に低下していることによると思われる<sup>30)</sup>。Bグループの対象者は、人生暦をふり返り「楽しいことばかりでした。」「良かったなあということが、私のまあ人生観です。」「今の到達点を見る限りは、幸せな形の中でいま生活させていただいておるといようなことが基本になつておるとおもいます。」「今も割合に気楽にいます。」などの肯定的な発言が多かった。Aグループの対象者もBグループの対象者も共に人生暦を語るにより人生を振り返る契機になったと考える。

対象者の人生に影響を与えたものとして、親や絆・縁という言葉があった。これは、愛情や人間関係の中で生きておられることを示していると考えられる。また、Bグループの対象者B-5や対象者B-10が語った「反骨精神で頑張ってきました。」の発言は、人生において心をとおして学んだものでありそれは肉体が衰えても残り<sup>31)</sup>、アイデンティティの形成にも大きく影響したと考える。

対象者が語った「おかげ」には、「周りの人の支えがあるから私は生きていける」という意味と、「人間関係の中でつながっていることを認識している」という意味があり、可視化されない存在への親和性を感じていること<sup>32)</sup>による発言であると考えられる。「おかげ」には、生きておられることに関するスピリチュアルな側面には宗教的な因子が含まれている<sup>33)</sup>ことに加え、

高齢者の生きがいの中「宗教」は重要な位置をしめる<sup>34)</sup>ため、高齢者とスピリチュアルおよび宗教的側面について検討していくことが重要である。

本研究のグループインタビューの過程の中で、高齢者自身が自分の人生とその時の思いを振り返り語るにより、社会階級の有り様とは関係なく自分自身の人生を肯定的に捉えるようになり主観的幸福感につながったと考えられる。よって、本研究の結果、社会階級の有り様が高齢者の主観的幸福感に影響をあたえるのではなく、経済的安定がありかつボランティア活動や自主的な活動などの何らかの生きがいある活動を通じて人との相互関係を維持しつつ、社会との関係を持つことにより得られる達成感や充実感により得られていることが明らかになった。そして、高齢者の人生暦には、アイデンティティが内包されていることが本研究データから示唆された。Levinson<sup>35)</sup>は、完璧な人

生でなくともその人生に意義と価値を見出すことで、死の訪れを受け止めることができると述べていることから、人生の意義と価値を見出すために人生暦を語る事が有益であると考えられる。

山岸<sup>36)</sup>は、高齢者ケアの課題として本人の生活史やライフコースを考慮した援助の方法が開発されなければならないが、内容の具体化および実際化は今日もなおかなり遅れていると言わざるを得ない状況であると述べている。高齢者ケアに従事する者は、高齢者の主観的幸福感には社会階級により影響を受けるのではなく、人間関係および社会との関係を保ちながらそれらから得られる達成感や充実感を認識し、高齢者の生活史やライフコースに内包されている高齢者の思いつまり人生暦を理解した援助をすることが重要である。このことが個別ケアにつながり高齢者ケア全体の向上につながると考える。

## VII. 研究の限界と今後の課題

本研究では、グループインタビューの特徴である相互作用により多くの意見が引き出せるグループダイナミクスが作用し多くの意見が引き出せる安梅<sup>37)</sup>と考えたため、調査方法にグループインタビューを採用した。しかしながら、高齢者一人一人の語りを深めることができなかつたと考えられる。今後は、人生暦をインタビューする場合、グループインタビューに加えて、個別インタビューも加えることも必要であると考えられる。そして、インタビュー対象者を増やして、主観的な幸福感を社会階級のみではなくあらゆる側面からさらに検討していく必要がある。

### 謝 辞

本研究にご協力いただいた A グループの皆様と B グループの皆様にご挨拶を申し上げます。

### 文 献

- 1) 総務省統計局. 高齢者の人口. URL : <http://www.stat.go.jp/data/topics/topi481.htm>
- 2) 高齢者の介護. In : 内閣府. 平成 22 年度版高齢社会白書. URL : [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/zenbun/pdf/1s2s\\_3\\_2.pdf](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/zenbun/pdf/1s2s_3_2.pdf)
- 3) Kaufman SR, 幾島幸子訳. エイジレス・セルフ : 老いの自己発見. 東京 : 筑摩書房 ; 1986.
- 4) Anbäcken E-M. On the need to address spirituality and well-being in later life care. In : 先端社会研究編集委員会編集. 特集スピリチュアリティと幸福 : 小特集語りえぬものを問う. 西宮 : 関西学院大学出版会 ; 2006. p. 101-35.
- 5) 遠藤辰雄. 自我同一性の心理. In : 遠藤辰雄編. アイデンティティの心理学. 京都 : ナカニシヤ出版 ; 1981. p. 11-27.
- 6) Jung CG, 高橋義孝訳. 無意識の心理. 京都 : 人文書院 ; 1977.
- 7) Clausen JA. ライフコースの社会学. 東京 : 早稲田大学出版部 ; 2002. p. 295.
- 8) 武石恵美子. 高齢期における就業からの引退過程と生活意識. ニッセイ基礎研究所報 2004 ; 30 : 26-57.
- 9) Atchley RC, Barusch AS, 宮内康二編訳. ジェロントロジー —— 加齢の価値と社会の力学 —— . 東京 : きんざい ; 2005. p. 138.
- 10) 小田利勝. サクセスフル・エイジングの研究. 東京 : 学文社 ; 2004. p. 151.
- 11) 新村出編. 広辞苑 第 6 版. 東京 : 岩波書店 ; 2008. p. 710.
- 12) 前掲 7)
- 13) 柳田邦男. 物語を生きる人間の「生と死」—— つながるいのち, つなげるケア —— . 死の臨床 2010 ; 33(1) : 4-5.
- 14) 安梅勲江. ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開. 東京 : 医歯薬出版 ; 2007.
- 15) 岸田宏司. 中高年男性の定年に関する基礎研究. ニッセイ基礎研究所報 2005 ; 39 : 6-30.
- 16) 岩井八郎. 高齢者の社会的地位の変化と幸福感 —— 「ライフコースと階層」研究の視点から —— . 生きがい研究 2007 ; 13 : 47-72.
- 17) 高齢者の就業. In : 内閣府. 平成 22 年度版高齢社会白書. URL : [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/zenbun/pdf/1s2s\\_4.pdf](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/zenbun/pdf/1s2s_4.pdf)
- 18) Paillat P. 老年の社会学. 東京 : 白水社 ; 1974. p. 37-46.
- 19) 青井和夫, 森岡清美. 現代日本人のライフコース. 東京 : 日本学術振興会 ; 1991. p. 393.
- 20) 八田誠. 高年齢者の学歴とライフコース. 日本教育社会学会大会発表要旨集録 1999 ; 51 : 243-4.
- 21) 前掲 8)
- 22) 室田保夫編著. 人物でよむ社会福祉の思想と理論. 京都 : ミネルヴァ書房 ; 2010. p. 25-31.
- 23) 村上龍. 人生における成功者の定義と条件. 東京 : NHK 出版 ; 2004. p. 12.
- 24) 前掲 23) p. 8
- 25) 原祥子. “いま, ここ” でいきる高齢者を理解する方法に関する一考察 —— ライフストーリーを読み解く視点から —— . 日本看護研究学会雑誌 2004 ; 27(5) : 83-92.
- 26) 金子勇. 地域福祉社会学. 京都 : ミネルヴァ書房 ; 1998. p. 252-4.
- 27) 前田信彦. アクティブ・エイジングの社会学. 京都 : ミネルヴァ書房 ; 2006. p. 90.
- 28) 前掲 8)
- 29) 前掲 16)
- 30) 前掲 8)
- 31) Montagu A, 尾本恵市, 越智典子訳. ネオテニー 新しい人間進化論. 東京 : どうぶつ社 ; 1986.

- 32) 中川威, 増井幸恵, 呉田陽一, 高山緑, 高橋龍太郎, 権藤恭之. 超高齢者の語りにみる生 (Life) の意味. 老年社会科学 2011; 32(4): 422-33.
- 33) 市瀬晶子. 高齢者の「語り」にみるスピリチュアルな苦しみの考察. キリスト教社会福祉学研究 2008; 41: 50-8.
- 34) 山中長悦. 生きがいの宗教的背景. In: 日本老年行動科学会監修. 高齢者の「こころ」の辞典. 東京: 中央法規; 2001. p. 97-8.
- 35) Levinson DJ, 南博訳. ライフサイクルの心理学上・下 (講談社学術文庫). 東京: 講談社; 1992.
- 36) 山岸治男. 生涯発達福祉論の基本的課題について. 大分大学大学院福祉社会科学研究科紀要 2004; 1: 31-8.
- 37) 前掲 14)